景観シミュレータを活用した住民参加景観づくりの実践

Practice of Landscape Planning by the Scene Simulator for Citizens' Participation

山本徳司
Tokuji YAMAMOTO

１．はじめに

美しい農村づくりでは、地域住民が地域社会の一員として農村づくりに積極的に参加し、地域についての問題を共有し、行政や専門家の支援を得ながら、身近なことから一歩一歩、楽しみながら、具体的な取り組みを進めることが大切である。本稿では、関心－参加－発見－理解－創出の活動プロセスに沿って実践された舞鶴市与保呂集落の住民参加による地域づくり活動の経緯と効果について触れるとともに、この活動の推進において、効果的なツールとなった景観シミュレータの活用について報告する。

２．地域環境づくりのプロセス

全国各地で実施されている住民参加による地域環境づくりの事例を分析すると、地域環境づくり活動のプロセスは、①関心、②知識、③態度、④技能、⑤評価、⑥参加と言った環境教育の目標を段階的に達成していくことに似通っている。そこで、ここで紹介する舞鶴市与保呂集落においては、一般的なプロセスとして、「関心」、「参加」、「発見」、「理解」、「創出」の５つのプロセスに沿った活動を約５年間かけて実践した。

３．住民参加型の環境づくり活動の実践

１）実践地区の概況

舞鶴市与保呂集落は、市街地から約４㎞離れており、与保呂川上流の谷あいにある密居集落であり、人口439人、100戸程度、農家数は77戸である。

２）主な活動とその効果

（１）関心・参加

生活環境アンケートを実施し、居住環境の問題点を整理した。これは、身近な環境問題を明らかにすることにより、地域環境に対して関心を持ってもらおうとしたものである。この段階では、問題点抽出型の点検をした。このような活動を進める中、子供から高齢者までが意見を出し合うための「話し合い運動推進委員会」を発足し、これを、後に、地域環境づくりのための新しい組織「楽しい村づくり推進委員会」の発足に繋げた。

（２）発見・理解

地域景観の評価、環境に対するアンケート調査を実施するとともに、その結果の広報と座談会形式による環境学習会を実施し、環境づくり推進の重要性の認識向上に努めた。また、景観シミュレーション画像を比較した景観評価会を行い、自分たちの住む環境や景観について、今まで気づかなかった良さ、悪さを再認識した。さらに、自然、文化・歴史等の資源の現状を把握するために、集落環境点検を実施し、住民全員の環境意識の高揚を図った。

（３）創出

最終的に「集落環境ビジョン」を策定することを目標とした。また、参加、発見へ至る途中段階で創出に当たる取り組みとして、「四季の景観カレンダーづくり」、「郷土史づくり」（全戸配布）を行い、楽しい村づくり推進委員会の活動を住民にアピールした。達成感を得る活動として、形として見える「ものづくり」を実施したことで、参加規模は急激に拡大した。創出が新たな関心を生むというプロセスの構造は成り立っている。

年 次	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目
関 心	花いっぱい運動（寿会30名） 川を美しくする運動（子供会23名） 生活環境点検アンケート（住民59名）	先進地視察（農事組合23名） これからの取り組みについての話し合い（推進委8名）			
参 加		話し合い運動推進委員会発足（8名）		楽しい村づくり委員会発足（34名）	
発 見		景観・環境意識調査（住民35名）	集落環境点検マップの作成（婦人会24名） 優良地区視察（寿会27名）	集落環境点検（住民71名）	水辺環境ウォッチング（住民32名）
理 解			集落環境ビジョン学習会（区会20名）	集落環境ビジョン学習会（楽しい委員会34名） 生活実感アンケート（住民120名） アンケート結果報告会（34名）	集落環境ビジョン学習会（楽しい委員会34名） 景観シミュレーション（住民44名） エコクッキング（婦人会30名）
創 出			区民だより復活（区会20名） 圃場整備始まる→	四季カレンダー作成・配布（楽しい委員会34名） 桜の植樹（区会6名）	郷土史編纂（推進委員会34名） 集落ビジョン「21世紀計画」策定（楽しい委員会34名） 炭焼き釜の復活（林産研・楽しい委員会50名）
延参画人数	163名	62名	130名	371名	398名

図１　地域環境づくりのプロセスに沿った主な流れ

＊農業工学研究所　National Institute for Rural Engineering

キーワード：住民参加、景観整備、景観シミュレータ

表１　活動全般の評価

活 動 内 容		全体	比率
これからも活動は続けるべきだ	は　い	224	93.0
	いいえ	17	7.1
	無回答	73	-
住民全員で活動を推進するべきだ	は　い	197	82.4
	いいえ	42	17.6
	無回答	75	-
労力が伴う活動はすべきではない	は　い	76	34.2
	いいえ	146	65.8
	無回答	92	-
地域づくりの専門家の助言は必要だ	は　い	192	82.4
	いいえ	41	17.6
	無回答	81	-
この活動を通じて、与保呂を今までより誇りに思う	は　い	179	81.0
	いいえ	42	19.0
	無回答	93	-

表２　具体的な計画に対する評価（代表例）

具体的な振興計画		全体	比率
集会所前の広場に桜の木を植え、周囲にツツジを植え、景観を配慮する	賛　成	232.0	86.6
	反　対	36.0	13.4
	無回答	46.0	-
日尾池姫神社の水路を、栗石で整備し、子供が遊べる親水公園にする	賛　成	229.0	87.4
	反　対	33.0	12.6
	無回答	52.0	-
愛宕さんの登山道を、ハイキングコースに整備し、植物に名札を付ける	賛　成	216.0	84.7
	反　対	39.0	15.3
	無回答	59.0	-
基盤整備田の土手に、芝桜を植え、管理しやすくする	賛　成	151.0	62.4
	反　対	91.0	37.6
	無回答	72.0	-

３）地域環境づくり活動の評価

各プロセスにおいて実施した活動を内容と時期と参画人数で分解し、活動の特徴を整理したのが**図１**である。活動が、関心、参加、発見、理解、創出の順に進む毎に、活動が多岐に渡り、参加人数も増えていることがわかる。また、**表１**より活動全般の評価を見ると、全住民が地域環境づくりを理解し、かなり積極的な姿勢となっている。ここで示したのは評価の一部であるが、この他に、地域農業への関心度、居住持続度等が上昇していることが確認された。

４．農村景観シミュレーションの役割

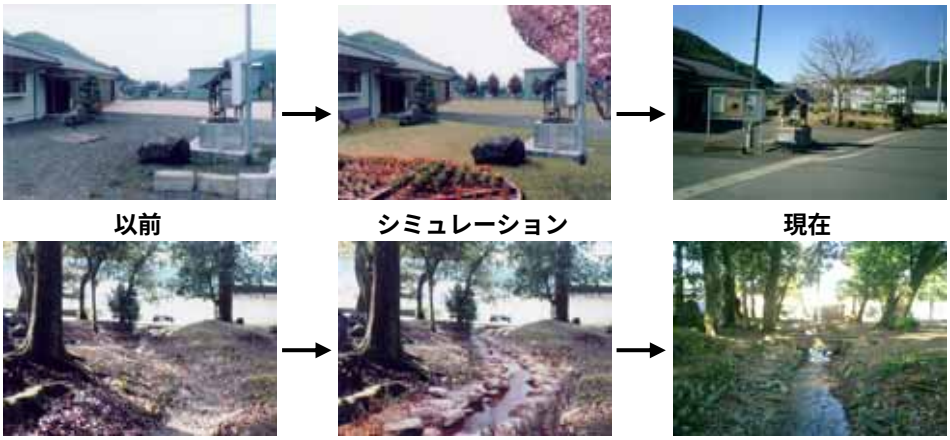
本活動において、景観ビジョンづくりに大きな貢献を果たしたのが、景観シミュレーションのツールである。景観シミュレーションは、①事業の計画・実施段階での事業後の予測による空間の共有認識、②景観づくりに当たっての住民と技術者との相互理解の促進、③景観整備前後の比較検討による評価や効果の判定、④住民参加による農村づくりにおける環境学習の推進の４つの効果がある。これまで一般的には、①～③が主たる効果であったが、この活動では、それよりもむしろ④を中心に添え、地域景観を様々に変化させて、現況の問題点や今後の方向性を探るための環境学習に利用したことにより、住民の景観に対する意識が啓発されるとともに、他地域との違いを見つけ、地域の魅力を創出する力となった。また、学習効果を上げるためには、単に景観をシミュレートして住民に提示するだけではなく、楽しさ、おもしろさの要素を取り入れたプレゼンテーションが重要であり、本活動でも、景観評価会等のイベントを駆使して、啓発、理解の促進を図った。

集落ビジョンに提案されている具体的な景観づくりについては、その多くを、住民の意見を直接受けながら、技術者が一つ一つ景観シミュレーション（**図２**）によってイメージ画を作成した。景観シミュレーションだけの評価ではないが、それぞれの計画については、**表２**の通りの評価を得ている。この計画のほとんどは、10年を経て、手づくりも、事業導入も含め、すでに実現しており、景観シミュレーションを行った例については、現在は、**図２**の右端写真のようになっている。

５．おわりに

本稿では、これまでに多くの地域で実践された住民参加による地域環境づくりのプロセスを体系化し、自発的に展開される農村づくりの活動プロセスを、関心→参加→発見→理解→創出の５つの段階に仮設構築し、舞鶴市与保呂集落に対して、このプロセスに基づいた実践的な地域環境づくりを展開したことについて、その評価を含め述べた。

その結果、本プロセスが有効に機能したことを示すとともに、この中で景観シミュレータを活用した取り組みが住民参加型地域づくりの推進に有効であることを述べた。今後、さらに、種々の地域での実践活動のケーススタディを通して、地域環境と地域社会条件に適合したプロセスの構築手法を検討する必要があると考える。



●集会所の広場に桜の木を植え、周辺にツツジを植える計画であった。賛成者が多く、手づくりで公園整備を行った。現在の写真と少々異なるが、桜とツツジは計画通りとなった。

●過去に神社の境内を通っていた農業用水路を、景観シミュレーションで石積み水路として再現した、現在は、住民の手づくりで水路がよみがえっている。

図２　景観シミュレーション事例